萬葉拾穗抄

十六上

萬葉集巻第十

春雑歌

七首

梯本朝臣人麻呂

1812 久方之天芳山此夕霧乃ひさかたの天の芳山この夕霧

1813 霞霏微春立流春霞霏微として春立つらし春霞

1814 巻向之檜原毛立流春霞霏微として春立つらし春霞

1815 麟閣之思者名積来八方古人之植基杉枝いにしへの人の植ゑし杉

1816 霞霏微春者来良之子等我手乎巻向山毛春去者霏微として春は来らし子等が手を巻向山も春去れば

1817 木葉凌而霞霏微このころの木の葉を凌ぎて霞霏微

1818 玉蜻夕去来者佐豆人之弓月我高荷霞霏微たまかぎる夕べ去り来れば佐豆人の弓月が高に霞霏微

今朝乃旦去而明日者来年木芽張春子鹿毛馴而早蒔之妻山毛今朝の朝去りて明日は来む年の木の芽張る春の子鹿も馴れて早まきの妻山も

子等名毛関者不居而朝越乎山妻之片降雪乎子等が名も関は居ずて朝越ゆる山妻の片降雪を

1819 1820 1821 1822 1823 1824

いひく別れんとも思ふ心あさからぬ事こそ頼つゝをこれも逢ふさとりの空しるべあすかがきをんとりみるやうにおこし書てあつ
にしきぎ行すゑとをめのことをみやうかおもひ書こし書てあつ
うまきとをもし次乃うらもおさしもしみるかてよめるやや
こゝろあるかけのうつさ景とをみめやすくなとめる名なてよ
さきそうしまゝハ片こ乃ら岩しイ本ニ開乃ようとゝそ女いおきけ
乃波ゝよさ奴おけて宜さ
勘書こゝゝ宜と

うちまひさすち之
祇日うちまひさとハ
あてとゝみ心うれハ
うゝ
うめ乃くるさける
類聚おもめ和ス

詠鳥歌 二十四首

作者未詳

打乗 春立 奴良志吾門之
うちまひさすち之ぬ〳〵わらかゝの
柳 乃宇礼尓 鶯 鳴都
やまれうゝひとあまり
梅 花 開有 缶邊尓家居 者
うめ乃そなさける乎とよいへみせい
之 毛 不有 鶯 之 音
こそ〳〵もの〳〵 営礼こゑ

春霞 流 尓 青柳之
くるかとそみるくもおやまの
枝 喙 持 而 鶯 鳴毛
吾瀬子乎莫越 山能喚子鳥
わせこをなこしやまよひこり
君 喚 愛瀬 夜之 不深 乃尓
きみよひくせよれみけぬこゝり
朝 井代尓 来 鳴 具鳥 泣谷文
のさみ〳〵ゝきなくくるゝ谷あれゝみ
君 冊 戀 八 時 不終 鳴
きゝゝこゝまを恋すなく

冬隠 春去 来 之 足比木乃
ふゆこもりはるさりきたる足ひきの
山 二文野 二文 鶯 鳴響
やまも野もうくひすなきそ

紫之根延 横野之 春野庭
ひさきのねふよこの まの野うの
君乎懸 管鬱 名雲
きみをかけつゝうくひすなく
春之去 者妻乎 求 等鬱之
るされいにほよをもとむと鳴
木末乎傳 鳴 作 名
こすゑをにほひつゝなくも
春日 有羽買之 山縣 猿吼之内敝
るとのあるさくひのやまへ
鳴徃 成 者 孰喚 子鳥
なきゆくなれのみこそ
不答 尓勿喚 動 曽喚 子鳥
こたへぬまでにいとよ
侘傺 乃 山 邊乎 上 下 二
さひてのやまへをのりつゝ

拌 春 山 近 家居之
わつさもる山ちかくいへゐ
續 而 聞 良牟 鷽
してきくらんうくひすの
打 靡 春去 来 者 小竹之末乎 押 靡
うちなひきはるさりくれはさゝの末乎
尾羽打 觸 而 鷽 鳴 毛
をはうちふれてうくひすは なく
朝 霧 尓之 怨 怨 有 吾 門 之 前 沾 而 喚 子鳥
あさきりのいとのみ門の前を沾して喚子鳥
三船山 従 八峯 越 渡 来 見
みふねの山ゆやまこえわたりくるみ
鷹 春去 来 者 然 為 鰒
うちなひきはるさりくれはしかすかに
天雲 霧 相 雪 者 零 管
あまくもきりあひ雪はふりて
梅花 零 覆 雪乎 裹 持
梅の花ちりおほふ雪をつゝみもて
君 令見 跡 取 者 消 管
きみにみせんとれはきえつゝ

梅花咲落過奴然為鱠

梅乃花咲ちりすきぬ奴ちりすきぬ
白雪庭ニ零重管

ふりつめりさ
梅乃花ちりすきぬ
包子もて小雪のふり
教わゆきを云ふ名
今更雪零ル日八方蜻火之
いまゝらの雪みつゝやもりけるふ乃
燎留春部ひ常成西物平

よつゝるみもゝのじら
梅乃花ちる咲ちりぬ
風文ニ雪者零乍然為鱠

早春の梅花を咲
かせよせよ雪いみりつゝふりすなよ
霞田菜引春去ニまちホ来

散ぬれ雪降ことさするよ
訪ふれ雪降ことを
うぐひすも雪みりやゝ篠家も叩きもりてそ陽熅ヤウエン

いよそゝよ雪みりやゝ
と文よ雪みりんやこと祇園のけそ乃ふりもゆるす日と八日れも雪に

感てえも時ふるもゆるやうみすふ日よ映ふくあるふ
何りーふいこゆと日る五衆祇本もゆるす日ふる張泳同

かせよせよ雪八みりつゝ類聚万葉凡ふとふてすふ八まるふりと
とめり古ふ今るも奴仙ふ八凡ふりもとふてる

万十上四

さりよくりと和ス古ふるふくいうす哥の心八篠家をみくくいう時
岸の雪八ふるこゝろ
山隊ヨ尓鬻喧而打慷

やまれをにうこのとまそうちうひき
春跡雖念雪落布沼

ふもしなりくと雪みりまさぬ
峯上尓零置雪師風之共

みねうくゝみりをくる雪風のふ
此間散良思春者雖ン有

こゝうちふくすふかあれふも
此一首筑波山作之ヲ

扁ン君山田之澤恵具採跡

きみかゝゝめ山田さなふくつゝむと
雪消之水尓裳裾ぬらす所ン沾ぬ

雪け乃みりうものすゝぬれぬ

さてとあけられ但古きうたにハ香ぬかすとて梅の花なとも雪さます
花乃ちりけれハ別によみける事もあれハ一概にハ定かたし後拾
遺にハわりなきをよくこよあり下略　予案八雲にハ是も花の象さ
ゆくと何も仙樹にもそこと花をは小雪けのゆとハ雪の清さ
あるさせりつむと定てしかさおほかりしれハかく体ふ
やよことされハそて花とはらんと段落るも　させりつむひさし
除きするとハ童蒙抄云文選山巨源ゆりける嵆叔夜の絶交書ニ
花をうやしするゆの至尊を献せんと欲すと　註　博物志曰むかし花
をわめてほかしとするを梅之花をも早く花期をなする　略記さたるすれ
梅の枝よなきて
白妙大概如云羽白妙に
沫雪ふるとハ埋るやうにいふ也
梅花にうつり鳴鶯の翅の沫雪のちりかかる
やうにいへる也　毛詩ニ
出自幽谷遷于喬木（ヨリ イウコク ウツル キヤウボク ニ）
とあれハ侍也　略注
山ちかくすみける雪
あたりにちるをよめるなし
ゆきをおきて梅をなこひそ
おの方雪を梅にとみ
るまて花にく雪をまし
つまて梅の花をまひ
かくて八雲抄三山かくつ
きてハ山のところを
よく問答歌のるお注
きのふこそ年はてゝ
時節の新を感ける
也し
かすみたなひくまかさね
口ハ同し

1840 梅枝尓鳴而移徙鶯之
梅の枝になきてうつろふうくひすの
翼白妙尓沫雪曽落
はねしろたへにあわゆきそふる

1841 山高三零来雪乎梅花
山たかみふりくる雪をうめのはな
落鴨来跡念鶴鴨
ちりかもくるとおもひつるかも

一云梅花開香裳落跡
一云うめの花さきかもちると

1842 除雪而梅莫恋足曳之
ゆきをおきて梅をなこひそあしひきの
山片就而家居為流君
山かたつきていへゐせるきみ

此二首問答

詠霞歌三首　作者未詳

1843 昨日社年者極之賀春霞
きのふこそとしははてしかはるかすみ
春日山尓速立尓来
かすかの山にはやたちにけり

1844 寒過暖来良思朝烏指
ふゆすきてはるきたるらしあさひさす
滓鹿能山尓霞軽引
かすかの山にかすみたなひく

1845 鶯之春成良思春日山
うくひすのはるになるらしかすかの山

霞棚引夜目見侶
1846 なつかしみ春のすゑつかた霞こめたる夕暮のそら

詠柳歌八首 作者未詳
1847 霜于冬柳者見人之
雲れのみ見れ柳を見る人乃
蔓目生来鴨
1848 可為すくなくもふかくも
浅緑潔懸有跡見九名二
春楊者目生来鴨
1849 やまのそに雪ふりそへて
山際介雪者零管然為我二
此河楊波毛延介家留可南
1850 このかはのやなきにかかる
山際之雪不消有乎水飯合
川之副者目生来鴨
1851 山かつのかきほにおふる
朝旦吾見柳鷺之
1852 あさなあさなみるにあかぬ柳かな
来居而應鳴森介早奈礼
1853 きゐるうくひすもりやしぬらん
青柳之縁乃細紗春風介
1854 あをやぎのいとのうすくもなりにけり
不乱伊間本令視子裳欲得
今見ぬいまうつくしみもろ人の
百磯城大宮人之蔓有
1855 百磯城大宮人のかつらかも
蚕者雖見飽鴨
1856 蚕はみれどもあかぬかも
梅咲而散流見者吾屋前之
1857 梅さきてちりながるるをわが宿の
柳乃眉師可南
1858 柳のまゆしおもほゆるかも

讃詞花歌二十首 作者未詳
1859 うぐひすのこゑをたづねてきてみれば
梅乃花介伴而来鳴
1860 梅の花にともなひてなく

うらむとよめるにて思ふ
可しまりけれとよめるを
けさる也梅乃うつろひれ八櫻乃時を待のまにけるまし但八字ある物云は頭一つ
ゆうすなるこそけすらうこ事の貌へこそ見てもよろる皆心得らくすべきの事乃
まけるしてハ乃心うもかのうれびをはけらべくハ櫻の花をさてかき心得乃
梅花の散りうら人櫻の時にさけうりなりて是に心得て見ちる可也

正好花
さくらの花の時はすぎねど見る人の
戀乃さかりとハ花を見る
こひふる盛なる
時とてちるを見はする
こ花を見て心を盛に
せんとて今ちるらんと

よりかざす柳のいと
妹の梅とハ妹が家の梅と
こしの花にうめ咲けり

櫻花之時者雖不過 見人之戀盛常今之將散

さくら花ときはすぎねどみる人のこひのさかりと今はちるらん

我刺柳絲乎吹亂 風尒加妹之梅乃散覽

よりかざすやなぎのいとをふきみだるかぜにかいもがうめのちるらん

每年梅者開友 空蟬之世人君羊蹄 春無有来

としごとにうめはさけどもうつせみの世の人きみしはるなかりけり

諒闇乃年なとよみし歌
しまかけや梅を梅ハ
さけともかなき人
君の見まくのすまさ
今年しのはしハ梅を
うつろふ多るはちれぬ
うつろふ仙覺僻よと
ふ定歌梅も我をえ
かけけるといふ心と同
むかしまてえまさる
馬なめてゆくかなき
ひとふ定かあらハ
艶色といふ歌
にあるへし
花さきてくしハ
もさき氣ハなけし

打細尒鳥者雖不喫 繩延守巻欲寸梅花鴨

うつたへにとりははまねどなはへてもらまくほしきうめのはなかも

馬並而高山部乎 白妙丹令艶色有者梅花鴨

むまなめてたかのやまべをしろたへににほはしたるはうめのはなかも

花咲而實者不成登裳 長氣所念鴨 山振之花

はなさきてみはならねどもながきけにおもほゆるかもやまぶきのはな

能登河之水底并尒 光及尒三笠乃山者咲来鴨

のとがはのみなそこさへにてるまでにみかさのやまはさきにけるかも

見雪者未冬有 然為蟹 春霞立梅者散乍

ゆきみればいまだふゆなりしかすがにはるかすみたちうめはちりつつ

1863 1864 1865 1866 1867 1868 1869 1870

き忍しおもひ流 寒ちるぬ袂をれこ物をそう歌つさらかうこ恨物抄
うりい歌そ名おし主ちるねしもの心のうそれれい雑ら歌まそ迄
こちりそこ山義名ろ歌の心こみすふまや
のと川乃今まうこさなに雪物云のと川土和こ名山地こと時りけ
まとい花をそ
雪ふれいやしまちり お雪をこれいやしそのやそちをこ

去年 咲 之 久木 今開 徒
こう乃きしひさき
土 我 将踵 見 人 名四二
ひさまし三俱雪ねニ
足 日木 之 山 間照 櫻 花
涙撒と内雨三空も
是 春 雨 尓 散 去 鴨
久き木よやみ散も
打 霧 春 避 来 之 山隈
袂乃妻咲ろや
最 木 末 乃 咲 独 見 者
何いきの山のま
山乃おい山のあいと
うちちひさまちり
ひさまを内お

春雉 鳴 高圓 邊丹 櫻 花
まちとるしるしるとのよりしるしる
散 流 歷 人 毛我裳
阿保山 之 仇宿木 沈 者 今日毛暗
何和山乃さねきの花
散 乱 見 人 無 二
ちりまりみるんひもう
川津 鳴 吉野 瀧上 乃
かそ川あるしるの川の波れう乃
馬 酔 木乎之 苗 置てそれ来るう 勿 勤ゆめ
波しるしるそもるまもる
春 雨 尓 相 而 不勝 而 吾 屋 前之
るさめ尓ほるそりねしるやれ
櫻 花 者 開 始 尓 家 思
さそうめさそうりう
春 雨 者 甚 乃 零 櫻 花
まさめへいしるまりるさそうる
未 見 尓 散 卷 惜 雲
ゆまとえまるうちるまなし

春去者散乎 幡 梅花ノ掛花

1879 詠煙歌一首 作者未詳

春日野介烟立所見嬬等四

春野之兎芋子採而煮良思毛

1880 野遊歌四首 作者未詳

春日野之淺茅之上介念共

1881 遊今日月八方忘

春霞立春日野乎往還

吾者相見弥日之黄土

1882 崔禹錫食經云狀似艾草而香作羹食之

1883 雁喜来之時

1884 春野尓意将述跡念共

百礒城之大宮人者眼有也

梅乎挿頭而此間集有

1885 寒過暖来者年月者

雖新有人者舊去

物皆者新

吉唯人者

舊之應宜

懽逢歌一首 作者未詳

住吉の岸之里得之鹿歯春花乃
すみよしのさとをえてうゐたるはるの
益希見君相有香聞
はなのかをきくにあふもみきとにあふるも

旋頭歌二首 作者未詳

春日在三笠乃山尒月母出奴可母
春日なる三笠の山に月も出ぬかも
佐紀山尒開有櫻之花乃可見
さき山に開有櫻の花の可見

白雪之常敷冬者過去家良霜
白雪の常敷冬は過去家らし霜

春霞田菜引野邊之鶯鳴喬
春霞田菜引野邊の鶯鳴喬

譬喩歌一首 作者未詳

吾屋前之毛桃之下尒月夜指
吾屋前の毛桃の下に月夜さし

下心吉兒指燄之燎者
下心吉兒指燄の燎るころそ

仙柱桃ハ花あるを以て実すくなきものゝ比喩とす毛桃ハ実ありて花なきものゝ比喩とす

春相聞

七首

榎本朝臣人麻呂

春日野尒煙立所見
春日野に煙立つ見ゆ

娘子等之春野尒出立而
娘子らが春野に出立而

益人開思柳手折可聞
益人開思柳手折可聞

吾妹子尒見尒将去
吾妹子に見にゆかむ

冬隠春開花
冬隠春開花

千遍限戀渡鴨
千遍限戀渡鴨

春山霧惑在鶯
春山の霧に惑へる鶯も

我益物念哉
我に益して物念哉

元稹詩二啼霧山鶯啼
尚少二この句ふかき心
乃心ハ遠乃さま
いてゝ見るむらの
花さけり遠きさまを
おもふ
向ひつの岡本繁ゐてよ
開在不成不止
霞發春永日あつき戀暮
夜深去妹相鴨
春去先三ゐさい枝幸命ゐさち在
後相吾妹
春夫為無柳十緒
妹心在鴨
衆
寄鳥歌二首 作者未詳
春之在者伯労鳥之草具吉雖不所見
吾者見將遣遣將君之當婆
容鳥之間無數鳴春野之
草ゐの根繁毛為鴨
わきへゆやんきみ乃
かおさうりてゝ
いもとあれとゐねしよせん
八重洲ハ元ハやまあるよし人をあれとゐねしよせん鴨乃ゐる葉韮
をとりて来るなりけるをほかるゝ
ふきをゝ
ねぎ
ハゆもりけり 奥儀抄云昔ゐる男野をゆきて女なのいねこゝ家を問
ま女我家ハの賤乃居ゝるまゝをれすゝふあゝりと
ゝ男いゝゐるゝてゆす成ぬ次乃まゝ
葉をゝゝ流ゝうひくすゞくゝゝ
哥林良枝云ハ流ゝうゝ我ハ見やん君乃ゐりと云の意小の世
作ゝゝ使りゐるゆ玉葉奥儀抄の説をハ宗祇ゝ師ゝ我ゝも用さ世給ふ
神宗抄云ハ歌ハ賤の業ゝゝと云ハ万葉の意ゝ
足乃山ゐゝをれハ都云まのまゝゝゝゝ
山吹れ志

けみ〳〵ちくて堂の走をまくらん君ハとをしも 今案 二ノ二
譯小異吉之ひりを考異吉と同久まゝ これハ郭玄等のかを
い賜の考をとることやくしもう又山吹の志げことりて堂のことよりくき
とりみ残りとやくしかり と案二山吹乃巳ハ賜いまいくもちざれいまう賜
乃堂をてまうそしとうも我ハ君乃ひりかと之やんとよやるハ以之て
ずといんまうかりとうまと古意乃詠皆ゆやんをと神又意移古
枝云又賜の堂をさハ賜の蓋（カゲ）十う乃物を考れくきふさーてさめるを
ふをそりもを賜のまやまそうもうめの活況ハ怪ちる吉況る
しこのさもは人左男ハいよやる意もけるまを 仙堂おを玄
賜ハ娘ををといまをれまよめそりもまるよ風ねをハ堂のかう
そをまくそれうくまの堂ハ抽と雨りのくくまくすると
し我ハ君んとよめをときこしも 墨仙況ハ程照神事乃乃
義を男うまや又奥俊おり乃我をも技をと之しり雪迎
て男ハ佐くきまや
かかうりりまうくハうくかおと頃とうそくまくちく
こハまでくちくとりも尋の思ハけき逸するといん祖得よ

寄花歌 九首 作者未詳

春去者 宇乃花 具多 思 吾越 之
妹之垣間者 荒 略
こしのゆきまのハあれなくるり

上ハよめる也
まちされハうのむそと
梅の百首と基後ハ
花そうーみ月ちう
ハちとよめり 八七拾
ふりしあの終り雨花そうー四月万十はまちされハうのむそとよ
めりうくハ山吹ちーー雨花そ三月ちうとさけゆまちされハうとめ
おりうや柱保りさうる雨花をそうすありうくれこれかハー
時の家のひりと

梅の花さきちる
その吉信乃久まと
孫をを他て梅の堂
ちり使まやと約て
春とも使うれん
よやる吉ちるへ
ちるあのまくもの

梅 花 咲 散 尓 吾 將 去
君之使 平 待 者 香花光
まてりしるしをとりてゆかん
春 流 咲 春さりくる野尓夢 喜
うめの花さける山きちる園より我ゆりん
君之使平待者香花光
まてりしるしをとりてゆかん
春流咲春さりくる野尓夢喜
ちるまのさくまちのふる萬の
下枝之延ちを久
ちる花乃こひをくしとりり
春 流 野尓 霞 棚 引 咲 花 乃
そくまのふるひさくもの

如是咸二年仝 不逢君可毋
かくあるまゝにあもぬきみも
吾妹子尓吾恋玄奥山之
わりせこよりこゝろくいおくもの乃
る歟 花之今盛
てしのそゝれいやさかりを
梅花四賀柳尓折雜
うめの花さかりも柳よおりよせて
花尓供養者君尓相可毛
をなうそうそゝへそもあふんかも
雜部思咲野尓生白管自
をもしさく野のおもてなるしらつゝし
不知事以所言之吾背
ねもころにいはれしわせ

あもふこゝろをもしり信く備よ行て筑紫尓
仙曰乃野ハ万乃名ごこゝしるし立ハ可勘
之さく野ハ集乃中よあるこゝ緒かつてしハまの筑紫如是
ハ我さく筑紫れいひてくまもれさも芒咲野也

いこん湖行よをみもこゝろもくすあせもくすあせ(サハセ)
我いをもこゝさく野ことをハ万乃名ごこゝしるし立ハ可勘
そこいこん湖のことをふ自管自(ヒラツヽシ)こいてゝ芒咲野ハ風雅集ろ
春山乃ゆき野乃花ゝきゝしけめるゝ芽かあて雪ふるこゝ基
後乃よめるおもてハ二ゆく掛ばゝ芒咲野ゝとゝ知めゝといれ

梅花吾者不令落青柳吉
うめの花吾ハちらさしあをやぎよ
平城之人来管見之根よ
あをなる人乃まてゝみるうん
如是有者何如殖兼山振乃
かくしのハあるうへうん山ぶきの
止時喪哭戀良苦念者
やむことしもなくこゝろくいハ

寄霜歌一首作者未詳
春去者水草之上尓置霜乃
春さればみくさのうへにおくしもの
消作毛我恋乞恵度暗
けぬへくもあれこひこえわたる

山吹の名ハやまふき

寄霞歌六首　作者未詳

春霞　山棚引　鬱
春霞　立渡　遠山之　峯乎越　妹乎相見
春霞　立田之山乎　今日往　越而　明日之春　如何将暮
吾戀　不止　本之繁　家波
一云　庭
左丹頬経　妹乎念　登霞立
春日毛　晩尓　成奴　度
靈寸春　吾山之　於尓立霞
雖立　君之　隨意

寄雨歌四首　作者未詳

吾背子尓　戀而　為便　莫　春雨之
零別　不知　出而　来　可聞

1916　1917　1918

別て知矣もねまでは
てふこと
いまさらにきみはいゆかじ
春雨にぬれかへらんの
心を人の知らぬにあらず
かくまではいはれたるは
ところの君はいなんぞ
さるさめに衣はいたく
ありけりて来ぬ
人をとゞめしなりや
春乃細雨はさみだれといふべきなりしをゆめしまこれみさゝめにてこねと
なしは七日七夜ありは七夜も来ましきこふにや濡れなくうきるをいさ
うめ乃花ちらすはるさめ梅花をちらしはるさめいかにてさかし
さ月そふ人の旅にやきしらむさりこきゐよいほりしな歳のすまんといふやう

今 更 君 者 伊 不往 春 雨 之 情 乎 人 之 不知 有 名 国
いまさらにきみはいゆかじはるさめの
こゝろをひとのしらざらなくに

春 雨 尒 衣 甚 将通 哉 七 日 四 零 者 七 夜 不来 哉
はるさめにころもはいたくとほらめや
なぬかしふらばなゝよこじとや

梅 花 令散 春 雨 多 零 客 尒 也 君 之 廬 入 西 留 良 武
うめの花ちらすはるさめおほくふる
たびにや君がいほりせるらん

寄草歌 三首　作者未詳

1919

くにひとのわかなつむ
神代抄 八雲抄ホくにと人
のわかなつむを二首く
仙抄ニハくにすと讀

國 栖 等 之 春 菜 将採 司 馬 乃 野 之 数 君 麻 思 比 日
くにひとのわかなつむらんしめのゝの
しばしばきみをおもふこのころ

や何 神代抄ニ云昭 云帝皇系圖云應神天皇十九年戊申十月吉野國栖奉醴
天皇而歌之訖打口仰笑 醴一日一宿酒也万葉抄云くにひとゝはよしのの奥ニ
くに人といふ者ひとのおかやけふしたりれまして隠住くるもの也神功
皇后又浄見原で皇子のおりたりくるの足付れまいりせて鮎とり魚
や其の草木なともまいりせくるまうれしめしわかくるを見て悦ひて
口をふくまき笛を吹くる也されはわかなつむといへる也抑しかるまあく
草とらゐはこゝくに人笛ふくまいりて御菜をまいりすること私云神功
皇后并浄見原天皇とはひかりの新羅て皇の御代と見る野とは志つえ
なれとこゝくに人といふきさらし吉野は古まことはきりるらすとよ神代抄
亜東日本紀十應神紀日十九年冬十月幸吉野宮時國樔人來朝
之因以醴酒獻于天皇而歌之曰下略 八雲御抄 しめのゝ大和國楯
りわかなれしもやところしめのゝり也しめの野 古点しめのく 吉野 河上也

春草之繁 吾戀大海

[illegible]

方 往 浪之千重 積

[illegible]

不明 公 平 相 見而菅 根乃

[illegible]

長 春 日平 孤悲 渡 鴨

[illegible]

寄松歌一首 作者未詳

梅 花 咲 而落 去者 吾妹乎

將來香 不來香跡 吾 待 乃 木曽

[illegible]

寄雲歌一首 作者未詳

白 檀乃 今 春山尓 去 雲之

[illegible]

遊 我 將別 戀 敷 物乎

[illegible]

問答歌十首 作者未詳

春 山之 馬酔木之 花之 不惡

[illegible]

公 介波 思恵也 哥因 友 好

[illegible]

石 上 振 乃 神杉 神 備而

[illegible]

贈蔓歌一首 作者未詳

大 丈之 伏 居嘆 而 進 有

[illegible]

四 許 柳 之 蔓 為 吾妹

[illegible]

悲別歌一首 作者未詳

朝 戸 出乃 君之儀 平 曲 不見 而

[illegible]

長 春 日平 戀 八 九良 三

[illegible]

いふこゝろはいはでしらるゝ故
といへり哥乃心ハかくのごとく
ぬる家にハ只あかずおもふよ

吾八　更　更　戀　介　相　介　家　留
われハやさら〳〵こひにあひにける

此一首不ㇾ有ㇾ春歌ニ而以ㇾ和故載ニ於ㇾ茲次ニ

しかしてあひえんハ杉よりしんの心なるべし　イおぼみなつし杉の家相やや
いそのかみふる杉神杉　おの哥れ杉なる故神杉ともいそのかみふるともつゞくるなり
太和石上といふ所あり布留乃社といふ神おはしますなり
かくいひし下略　神杉とハ神木の杉也住吉の松を神松といひ北野の梅を神の梅
といふごとし　仙杉ニハ女乃布にしひし小石とまれもまて布にさかへれしとはの
意ありしそれをさしとやみの神りしこゝをさしくれハさることどもありしかう
こしまかせまする杉を布留乃神杉といふ　神びるとハ神さびくといふ同じ
哥乃心ハあかずしてなげする事也ニ哥の心伝芸深きや此哥類聚万葉にハ
神びぬしと和せり　むかし九九おの哥にかくらねなりいかわねぞりしと
いへる哥あれハ未ニ遇ニ甸ハ神ひぬし乃訓あしく哥の心ハ神さびたしに我
ハもくろり人乃あふ間にあひかたきなり　されハかくうるねとのあかとも
はずしその心なるべし我や乃やみやまにかゝりて心の八しやハの心なし

此一首不有春歌　此部ハ皆春の哥なるを雑に此哥乃哥春の部にのせ

しかれどもおもちも此乃哥れ和哥あるを此部よりかきていしとの心也
さのかたハみまだなりぬ

狹野　方　波　實尓　雖ㇾ不ㇾ成　花　耳
さのかたはみにならずとも花のみに
開　而　所見　社　戀　之　名草　尓
さきてみえこそこひのなぐさに

狹野方ハむかし花さく
なり仙覚ハさのかた
ハさねかつらといへり
まそ哉の八名とそい
〔ヘリ〕但類聚万葉よ
春木乃ねかづらさね
さの中にさのかたを

狹野　方　波　實尓成　西　乎　今　更
さのかたはみになりにしをいまさらに
春　雨　零　而　花　將ㇾ咲　八方
はるさめふりて花さかめやも

出ほるねかくおぼこハ別所よ出てまでかしこ乃ひさのかたこハさね
のことといふまくとも何れにハ哉の説信用志
かたし見安なども仙説より志からずれ又見ざるの出の見えなども八
雲御抄にもさしてさる見るなくりことさうまかやや哥の心ハみになる
すさもとハ人にあをねかすをよくいへるやもおもしろう何いふとし
いへりあみすさもまえてしうふせよあつき歌事にせんといへり
さのかたハみになりかりと　花りたまくまたとといへるをいひのれん

とく一つひとつ心をこめてみまもりて花さうんや
ひよ花ちりみふりしあいだにさやうのやうしの
ついさうひさうの梓弓津邊有莫告藻之花咲及二會君毳
梓うひいさごいうん花
詞心はいかなる名をも
山吉類聚ふ川はべ
よりとも和こころのうめを和せり仙台
引はのまもと和
ものかうと和して
演成式乃訓とうり式乃烏ふさもひまろとふ并をいふる
へをひくゆまでいる仙おり伐文り信男古くくり引はふ集者七う
人九乃旋頭あるも梓弓引はのうるものかうれ花もなかり名ふ
かくのう乃いうもの八七九おりいうもの花ふ屋をふ心とをふ安同ふ
寄の心ハ二百ハいうもくというん風俗おの寄ふものかうのおきくまそ
ふありねとみよ若ていうもの花のやもくけりうすまてあひの〳〵と

来座吾背子時自異目八方
きませわりせことさわりめやも
川上つくのイ伊都藻之花乃何時
なまれ
めそのうのいつもの花いつも何時

そるさめのやますの雨之不止零零吾戀
ゆまつまふをのつうふ今
とうとうれいをゆ
やまてつまくちのみ
うすすみをあを
せめそと
わきもこふこひて
まかをふこふれと等
こそくはわまもも都
やまするくとひこ
くやまするくとひこ
ーさをそうとも
ひいふねはをや
それより二首同ふ
心ハ明心
そるさそれいまうく

春雨之不止零零吾戀
そるさめのやますの雨之不止零零吾戀
人之目尚矣不令相見
ひとめもすくをうひとせさくん
吾妹子亦戀作居者春雨之
わきもこもこひつそれいそるさめの
彼毛知如不止零作
かもくいそるこそやまするくわうこふる
相不念妹哉本名菅根乃
ひひもわねいもをもにもとる菅のねの
長春日平念暁牟
ふるまこそる日をおもいそくさん
春去者先鴬鳥乃鷺之
そるされいまうくぎりの等れ
事先立之君乎之将待
こことにまこーそーきみをまちくん
相不念兒故玉緒
おひおりくすあんこゆふものをれ
長春日平念暁久
あのきそる日をといりくさく

序文 上略 日本紀第一曰如何婦人反先言乎 仍勅 然而 有此歌 乎

憂雜歌 裏乃舎悽莽 乃至 哀乃舎回警 喩等乃至 歌乃舎

雑歌 裏乃舎悽莽 乃至 哀乃舎回警 喩等乃至 歌乃舎

憂雜歌 作者未詳

大支尓武士之軍乎召而 出立向 故郷之 山乎見乍 思戀 嘆毛 名備山尓 明来者 柏乃 左散尓 宿鳥乃 夜之深去者 小松之 若末尓 里人之 聞戀麻田山彦乃 答響萬田尓 山霍公鳥 鳴等毛 聞乍 不飽 可有 霍公鳥 汝始音者 於吾 欲得 五月之 玉乎 貫交而 将鳴 朝霞 棚引 野邊 足檜木乃 山 霍公鳥 何時来将鳴

反歌

客尓為而 妻戀 為良思 霍公鳥 神名備山尓 左夜深而 鳴渡

右古歌集中出 三十七

霍公鳥 都麻戀為良思 左夜中尓 鳴渡

霍公鳥 汝始音者 於吾 欲得 五月之 玉乎 貫交而 将鳴

朝霞 棚引 野邊 足檜木乃 山 霍公鳥 何時来将鳴

旦霞 八重山越而喚孤鳥
吟八洲來屋戸毛不著 九二
霍公鳥鳴音聞哉宇能花乃
開落岳赤田草引城嬬
日夜吉鳴霍公鳥覺乍毛
吾草取有見欲得
藤浪之散巷惜
霍公鳥今城邊呼鳴而越奈利
旦霧八重山越而霍公鳥
宇能花邊柄鳴越来

ほととぎす 八重垣紀伊

今城邊呼鳴霍公鳥
木高者曽木不隠
來鳴含響而應
難波方
他時從者今社鳴
木晩之暮闇有者
霍公鳥廬平家登鳴渡
霍公鳥花橘之枝介居而
鳴響者花波散作
今朝之旦明尓鳴都流波
君將聞尓
可朝宿疑将寐

1951 1952 1953 1954 1955 1956 1957 1958 1959

慨我四去社者
よゝえやしゝ霞公多人ゝこゝろ、
音之千鹿来喧響目
こゝろのゝゝふまさゝとゝのめ
霍公鳥けさのあさけ
今夜乃於保束無荷
このゝゝのおゝつゝあさけ霞公多
喧奈流聲之音乃遥尤
鳴ゝるこゝろをゝのゝるゝき
五月山宇能花月夜
さゝきこゝうのゝ花ゝゝ夜
雖聞不飽又鳴鴨
きけともあゝくゝあゝんゝし
霍公鳥来居嘗鳴香吾屋前乃
おゝきすゝきなくゝしあゝ我有の
花橘地二落六見牟
ゝゝをゝのゝおゝんゝん
五月山宇能花月夜
さゝきこゝうのゝ花ゝゝ夜霞公多
雖聞不飽又鳴鴨
きけともあゝくゝあゝんゝし霞公多
霍公鳥来居嘗鳴香吾屋前乃
おゝきすゝきなくゝしあゝ我有の
花橘地二落六見牟
ゝゝをゝのゝおゝんゝん

霍公多いふ
厭時無菖蒲
霞公多いふとゝのゝをゝ
あやめ草
黄
将為日従此鳴度礼
山跡庭啼而香将来
ゝゝふまさゝとゝのゝれ霞公多
汝鳴毎人
あゝのゝこゝふまさゝとゝおもふゆ
所念
辛能花乃散巻惜
うゝをゝちゝまゝのゝみ霞公多
野山来鳴令動
野ゝゝゝゝゝきさゝとゝのゝす
橘之林平殖
橘乃をゝをゝをうゝん霞公多
常介冬及任度金
ゝゝねゝのゝみまゝのゝ霞公多
雨霽之雲尓副而
ゝゝをゝのゝをゝゝゝ霞公多
猶春日従此鳴度
ゝゝをゝさゝとゝのゝる

物念登不宿旦開尓
おもひのぶといねぬあさけ尓霍公鳥
鳴而左度為便無左右二
あまさへなきつるすへなさ尓
吾衣於君會服與登霍公鳥
わかきぬへ尓染つけまつと
吾乎領
われを
本人霍公鳥平八希将見
もとの人尓霍公鳥
今我沽來戀乍居者
いまやかもくるしくをれる
加是許雨之零尓
かくはかりもの恋しくに霍公鳥
早之花山尓猶香将鳴
うのはなやまし尓なほかもなかん

詠蟬歌一首作者未詳

黙然居毛将有時毋鳴奈武日晩乃
もたもあらんをいつしかもなくへき日くらしの
物念時尓鳴管本名
ものおもふときに鳴つるなもきと

詠攀(ハツ)歌一首作者未詳

思子之衣将摺尓染尓保比與
おもふこのきぬ尓にほひよ
鳴之攀原烽不立
なくはつ原煙立つな

詠花歌十首作者未詳

風散花攪吹袖而
かせちるはなをふきまかせてそ
為君御跡思乎
きみかあとしのふるを
香細寸花攪手玉貫
かくはしきはなをたもとり玉にぬき

将送　姉者三礼　而毛有香
霍公鳥　来鳴　響之
花散　庭乎将見　人執
吾屋前之花橘　者落　尓家里
悔　時　尓　相在君鴨
見渡者向野　乃石竹　之
落巻　惜毛雨　莫零行手
雨開開　而國見毛将為乎　故郷之
花橘　者散　家牟　可周
野邊見　者瞿麥　之花　咲　家里
之花咲

吾待　秋者近就　良思母
吾　妹子尓　相市乃花波　落不遍
今咲　有　如　有與奴香聞
春日野之　藤者散　去而何物鴨
御狩　之　折而　将挿頭
不時　玉平兼連有　宇能　花乃
五月　平　待者　可二久有一

同哥歌二首作者未詳

宇祢花乃 咲落
うの花も さきちるころの 霍公鳥
哭而 沙渡 公者 剛ほ八
なきてさわたる さ月闇 世流 霍公鳥
聞津八跡君之 小竹野尓 亜沽而 従此 鳴綿類
きつゝもとこそ 思へるを うの花の
白妙衣 ほしあへず 里の
こゝろくまでも 有ける哉

警喩歌一首 作者未詳

橘 花 落里尓 逼 名者
ほとゝぎす 山 霍公鳥 将令響
なきとよもすも

夏相聞

寄鳥歌三首 作者未詳

春 霍公鳥
之在者 酢輕 成野之
まちかてに 霍公鳥
なきそわたる

保等 穂路 妹尓 不相 来尓家里
ほとゝぎす いもにあえずて きてかへる
なくこえきけば

五月 山 花橘 尓
さつき山 花橘を ほとゝぎす
隠 合 時尓 逢有 公 鴨
ほとゝぎす なきとよもして あるべき
霍公鳥 来鳴 五月之 短夜毛
かとゝぎす なきとよもして 短夜も
獨 宿者 明不得 毛
ひとりし ねれば あけかねつも

寄鶯歌一首　作者未詳

日翁足者時常雖鳴我戀
ひろ〳〵ハこゑもちけどもわっとする
弱女我者不定哭
よゝめされハさまくまする

寄草歌四首　作者未詳

繁交
人言者夏野乃草之
ひとことハ夜野乃草されちけくも
蚊與吾　宿者
迦者之戀乃繁久夏草乃
こゝろのあれちけくもつゝまの
苅掃　友生布　如
乃そくおひまくこと
真田葛延　繁交　如是戀者
まくもゝゑ夜野之ちけく恋ぞ
信　命　常有　目八方
まことわっひもめやも

1982　1983　1984　1985

寄花歌七首　作者未詳

吾耳哉如是戀為良武垣津旗
わまこのころやくゝ恋ろんかきつゝ
毋頬令妹者如何將有
かわてるこもそっかあらん

片撓尓緣叫曽吾撓吾背兒之
かたよりかくとをわのよるわのせこう
花橘平將貫跡母日千
もかくらつるをぬんことひく
鶯之往来垣根乃守能花之
うぐひすのかよふかきねのうの花れ
厭事有我君之不来座二有人尓
うきことあれやわきまもきぬ
守能花之登波無念尓指天
守乃花のさくとハなしおもひて
戀也將渡獨念尓指天
こひやわたんひとりこゝろに
吾社菜憎毛有目吾屋ヶ之
わまこそハかそともあわやその

1986　1987　1988　1989　1990

1991 1992 1993 1994 1995 1996

1999 1998 1997

2002 2001 2000

（以下略）

（以下略）

とふまくふハ袖まくり
こひゆき多まての歌
めふ言作ふ告んと
志ら玉乃いほつとひを
見雲玉乃おりくあつ
むるをかたいはさ
ね玉乗心でいまかさなる
當もこきそしと見るを
我ハありん日待なれか
まかこつるともなしと
阿まのかハ水かけ草
陰草とハかくれん諷詞よ
わかれハ牛女乃多まちこ時ハ
新ハうつる故ぞ新
まめそそかけ草をも
わかまちし 秋萩咲きぬ

2012
水良玉 五百部集乎 解毛不見 吾者于可太奴 相日待尓
志らたまのいほつゝとひをときもミす われハかれ多ぬあハん日まつに

2013
天漢 水陰草 金風 靡見者 時來之
あまのかハ水かけくさのあきかせに なひくを見れハときハきぬらし

2014
吾等待之 白芽子開奴 今谷毛 尓寳比尓徃奈 越方人迹
わかまちしあきはきさきぬいまたにも にほひにゆかなをちかたひとに

仙日か陰草ハ稲毛をまきる草かれと言わ
この川とをかり稲葉の秋風にあひきゝ肯なる
まハまかしと君師說にハ何多か草乃
天河も河といふに付て
しあ常此河ふ浮てぬまて見る
白ひふゆかなハ栢戲にゆかんと牛女河を故

てりれハ牽牛人と言
わかせこのうらこひ
うら戀ハ下ふ戀る也
まけなかくこふる心
真氣長く乃真と
ふ只氣長くと珍
長くも戀る也
秋風も晴の音つれと
ゆしく紐をときて
りまんと云かと七夕
の歌秋風よ心付め其
しる也るへし
こひしけハけなかき
ありて戀わたりと
路りしき物をゆれな急
つまなの今しふとも

2015
吾世子尓 裏戀居者 天河 夜船榜動 梶音所聞
わかせこにうらこひをれハあまのかは よふねこきとよむかちのおときこゆ

2016
真氣長 戀心自 白風 妹音所聽 紐解徃名
まけなかくこふるこゝろゆあきかせに いもかおときこゆひもときゆかな

2017
戀敷者 氣長物乎 今谷 乏之牟可哉 可相夜谷
こひしくハけなかきものを今たにも ともしむへしやあふへきよたに

2018
天漢 去歳渡伐 遷閇者 河瀬於蹈 夜深去來
あまのかハこそのわたりハうつろへハ かハせをふむによそふけにける

2019
自古 擧而之服 不顧 天河津尓 年序經去來
むかしよりあけてしはたをかへりミす あまのかハつにとしそへにける

2020 2021 2022 2023 2024 2025 2026

とまれ　と申されあつまきこゝろもきこねすをよめり七夕のこゝろえ
なりやうてもよまんものよりもよりやさしきものにて心得
きこゝやうのものかゝれていまこゝろなくさきこゝろ心あまりてんこと
わりこゝろをつくすものそも〳〵牽牛乃ひこぼしの織女のあまの
しまかりこゝろ　為一我　登　織　女　之　其　屋　戸　尓
きみかあらそ久しき時ゆ　白　栲　衣　袖　麻　久　尓
心ひとつに思ひまさりて　天　漢　機　音　聞　孫　星　與
おもふそなかきものをとこゝろ　織　女　今　夕　相
しまかりこゝろをつくしてふみをかきてやるこゝろ
君　不　相　久　時　織　服
ぬのそれこゝろの
てにのこゝろ
あきされハ川をわたりて

七夕の心を
よめり
神世の
ことを
ひきて
よめり
天の
川原
にて
牽牛
織女
の
あふ
よし
を
よめり

七夕の心を
よめり
神世の
ことを
ひきて
よめり
天の
川原
にて
牽牛
織女
の
あふ
よし
を
よめり

吉　哉　よきこゝろや　雖不直　こゝろすなほ　奴延鳥
うえやし　こゝろすなほ　そのこゝろ
浦　嘆　なげき　居　おりきる告　子　鴨
うらなきをとにたてゝなけゝんとしもこゝろ
一年　途　七　夕　耳　相　人　之
ひとせをまちわたるとあふひとの
戀　毛　不　竭　者　夜　深　徙　久　毛
こひもしきねはよもあけゆくこゝろ
一云　不　盡　者　彼　宵　曽　明　尓　來
一云にはつきねはさよのふけゆくなりけり
天　漢　安　川　原　定　而
なかれ川やすのかはらさだめてゝ
神　競　者　磨　待　無
こゝろくらへさゝきまちこゝろよ

七夕の歌一首　庚申年作之

作者未詳

棚　機　之　五　百　機　立　而　織　布　之
たなはたのいほはたたてゝおりぬのゝ

秋去衣取見
あきさりころもとりみん
執
重衣物云々
二八漸こりつゝ天照太神乃ゟ乃礼いまそ一時八百万乃神ゟ
ヤホヨロツ
けとおく太神をゝのく〳〵祈卫出てまんをそゝりうとせめうひまてこ
おりやすのわゝかとりつゝ八雲なす乃清流としゆ寺の泥をも寺の心
い天ゟ乃八衢乃ゟ原ゟまてかゝりてさまこさく牛女乃さゝ〳〵竜田の
時ゝ待すゝ常まてかゝそゝとゝりさゝ〳〵ゝ乃機とりも八雲なす秋
ゝまそゝのいかそゝ五百の機を出見おりゝ乃機とりも八雲なす秋
さり衣こゝ七夕乃布こ重衣ゝ秋乃衣こゝ乃布こ重衣ゝ秋さりゝ秋のま
ゝもゝすゝ乃ゝれゝうんひこりゝてゝと山ゝゝそゝ心ゝや
そゝゝありてゝまる
年有而今香将巻為玉之
年のあまりてこうまきさんうそゝのを
夜霧隠遠妻手平
夜霧隠遠妻手平
吾待之秋者来與吾
吾待之秋者来與吾
わゝまちて秋いまさりね妹とわれ

秋風吹漂白雲者
秋風吹漂白雲者
うきさりせの山きてよつすゝ雨ゝ
今夜相
牽牛與織女
今夜相
牽牛與織女
ひこりとゝまゝそんゝ
天漢門亦涙立加謹
天漢門亦涙立加謹
あまれゝそゝとゝりあゝうまゆめ
不来一益有良武
夕谷君之
不来一益有良武
夕谷君之
さゝりまゝそゝ
可谷有
家口氣長物乎
可谷有
家口氣長物乎
こひくけるをおゝくけるこ
癒
癒
へゝそゝみやうこそもそゝ
又我吾癒將居
又我吾癒將居
隔
隔
あゝそゝとゝりこゝ
者氣長物乎天漢
不合
者氣長物乎天漢
不合
あゝさるけるゝ
我吾癒居年
我吾癒居年
けゝのこさゝやわゝこひをそんん
今夜盡而明日從者
今夜盡而明日從者
年之癒
年之癒
うゝこいこひてゝうすゝ
如常
如常
何事在曽級不解在牟
何事在曽級不解在牟
あゝことあまこうひもさゝうんん

織女之天津領巾雲隠
數裳相見君矣天漢
舟出速為夜丕深間
秋風清渡月人妻士
天漢雲隠渡牽牛之
機音西南妹社
君舟今榜來良之天漢
霧立渡瀬此川
秋風尓河浪起
漸

三舟停
天漢川聲清之牽牛之
秋榜船之浪
天漢川門立
君来奈里紐解待
天川河向立
座而年月
漢川門
明日從者吾玉床平打拂
公常不宿
孤可女蘇

童蒙抄云ひもとは
女乃さものゝ小裾帯
領巾とて物をおほ
ふるものなれば
物をまきてかくる
ものをとしてる歟
あきうせのはさ々な
誠日ばかり星れ渡りの
舟かけを毎月して様
異れこゝ渡らん傍
誰もそらの風情
なれそ君もわれも
これ〳〵舟のまゝ
きみのみねまさ
ここまでゝ

やそうち舟はおもひ
乃渡りを年但八年物
はのはしに風八十をこゝ
とらもこゝにあまて舟
あまのそ川をこゝ
秋〳〵はみ雁の秋〳〵
なれりそかとり
類聚万葉うはとも
ひもとまてゝ
あまのうへかとうり
川門いかてこゝ
なすらいわりをこと
玉床もらはる君
ことのみ逢隔て
もわるるに暴て
よりなをのちをな
けくそうりんも